



## 第一回 江戸城

～太田道灌による築城と関東の争乱～

今回は、第1回目ということで、どこを取り上げるか迷いましたが、やはり東京で働く私達にとって一番身近な城「江戸城」を取り上げることにしました。ただし、徳川将軍家の江戸城では面白味に欠けるので、家康の関東入りより前の、初期の江戸城の築城と関東の争乱について紹介します。現在も残る地名が出てきますので、現在の場所を地図上で思い浮かべながら読んでみてください。

江戸城は、1457年に知将として名高い太田道灌（おたどうかん）によって築られました。応仁の乱が起こる10年ほど前のことです。当時の地形は、東西で大手町から日本橋くらいの幅の半島が本郷台地から南へ汐留まで伸び、その南から日比谷まで海が入り込んでいたといわれています（図1）。その日比谷入江北方の

丘、今の江戸城本丸跡及び北の丸公園付近に初期の江戸城は築かれたようです。道灌が築いた江戸城は、後の徳川江戸城には比べるべくもなく、もちろん石垣ではなく掻き揚げ土塁の城でしたが、当時は「道灌がかり」と呼ばれ、本丸にあたる子城と外城との間に中城を設けた3部構成からなる、攻守ともにかなう要害堅固な城郭だったといえます。城中には「兵ハ静カナルヲ以テ勝ツ」という中国の兵法から名付けた「静勝軒」という後世の天守閣のような3階建ての居館がありました。そして文才にも優れていた道灌は、後に上京した折、後土御門天皇の御下間に答えて、「わが庵は松原つづき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る」と詠んだと伝えられています。この歌から富士見亭とも呼ばれた静勝軒は、現在の富士見櫓の位置にあったと推定されています。

また、江戸城築城については、道灌が江ノ島に参拝した帰り、舟がちょうど千代田に差し掛かったとき、コノシロ（コハダのこと）が舟に飛び込んで来たのを見た道灌が、これは「九の城」を手に入れるということだと喜び、この地に城を築くことにしたという伝説も残されています。

太田道灌は、当時関東を二分する抗争の中で、河越城（川越城）、岩槻城とともに江戸城を築き、数々の戦いで名声を高めました。

足利尊氏が鎌倉幕府を倒して室町幕府を開いた頃から、鎌倉には鎌倉府が置かれ、尊氏の子息が入り、「関東公方（かんとくほう）」と呼ばれて関東の統治を任されていました。そしてその執事を務める上杉氏



図1 江戸城築城当時の地形

